

1 新駅「御厨駅」開業と地域歴史資源の活用について

国内最大の前方後円墳、仁徳天皇陵古墳を含む百舌鳥（もず）・古市（ふるいち）古墳群が世界文化遺産に登録される見通しとなり、最近の古墳ブームに追い風が吹いている。来年3月開業見込みの「御厨駅」周辺は、国指定史跡である「御厨古墳群」や県指定文化財の「堂山古墳出土品」等を有しており、考古学の宝庫ともいわれている地域である。この古墳や出土品に注目して、「御厨駅」周辺の賑わいづくりに活用したいものと考え、下記について伺う。

(1) 地元のシンボルとして“靱形埴輪”を「御厨駅」前に蘇らせる

昭和42年頃、磐田駅前にターミナルを作る時、磐田市を象徴するものを設置したいとして検討されたシンボルが、堂山古墳出土品の靱の埴輪であり、その出土品の約3倍の大きさを製作され、磐田のシンボルとして駅前に設置され親しまれてきた。その後、平成27年の北口広場整備時に撤去され、今は本庁舎東側に置かれている状況にある。そこで、この靱形埴輪を、「御厨駅」前周辺に移し、埴輪のふるさと御厨地区のシンボルとして蘇らせたいと思料するが当局の見解を伺う。

(2) 「松林山古墳」の歴史的価値アピールについて

国指定史跡「御厨古墳群」の中心的古墳である「松林山古墳」は東海地方最大級の前方後円墳であり、その出土品は、国立博物館という保管場所を得て、高い評価で展示されている。

そうした状況から、「御厨駅」からすぐ目の前にあることでもあり、「松林山古墳」をもっと世の中にアピールし、「御厨駅」周辺の賑わいづくりに結び付けたいものと考え、下記について伺う。

- ① 松林山古墳の文化財価値・歴史的価値に対する市の自己評価が低すぎないかと思うが当局の見解を伺う。
- ② 松林山古墳を、観光資源として魅力・集客力アップにつながることを意識した整備を、段階的に行っていく方向を打ち出し、その準備に入ってほしいものとするが当局の見解を伺う。

2 社会問題に対する取り組みについて

超高齢化の未来は、これまで十分なチャンスが付与されて来なかった少数派（若者・女性・外国人・障がいを持つ者等）に対して、社会が積極的に投資することから始まるとする某社会学者説と、明るい場所にいる者は、暗い所にいる者を見ることができないとする教訓の視点から、最近の社会問題となっている事項の中から下記の取り組みについて伺う。

(1) 「ひきこもり」の実態把握につなげる対応の実施について

ひきこもりの「80・50問題」を、社会全体が認識せざるをえない悲惨な事件が相次いで発生し、社会総がかりで支援していくとする機運が高まっている。市においても相談受け入れ窓口等充実させてきているが、ここはもう一段踏み込み、ひきこもり者の孤立を防ぎ社会とのつながりを進める目的をもって下記の対応を提起する。

① 行政は、ひきこもり解消に積極的に、そして社会全体で取り組んでいくことの決意を市内全世帯に向けて示し、ひきこもり者・ご家族に安心感と相談行動を促すと同時に、自治会や事業体に受け入れの協力を求めるとする周知を、全戸に配布して実施したいものとするが当局の見解を伺う。

② 自治会連合会・民生児童委員等と連携して、実態調査を実施したいものとする。大変デリケートな問題なるも、社会と接触ができない方々への対応としては、ドアを開けての調査が必要と思うが当局の考えを伺う。

(2) 多文化共生のまちづくり専門担当として外国人の職員採用について

磐田市はここ数年日本人が減少して外国人が増加しており、この3年間では日本人は2,329人減り、外国人が1,743人増えている。この外国の人達と協働し、外国人に選ばれる磐田市になってこそ多文化共生社会の実現と言えよう。そのためには、行政・企業・地域社会が一体感をもって課題を克服し、異文化を持つ彼らを理解して日本社会になじませ、導いていくことが求められるが、推進するには適切な人材が必要となる。

袋井市では、市内に住む外国人が増加傾向にあるとして、この4月初めて正規職員に外国人二人を採用したとして話題になった。磐田市においても、そうした仕事がふさわしいバイリンガルの人材はいると思われるが、1名でもよい採用を検討することについて見解を伺う。